

特別講演

美術品としての日本の書物

The Japanese book considered as a work of art

Kenneth B. Gardner*

In Japan, as in other countries of the world, books originated as objects with a practical purpose — to convey information. In the course of time they developed into things of beauty as well as utility. Books, both handwritten and printed, came to be valued not only for their contents but also for their outward form. Paper and ink of high quality, fine calligraphy, attractive ornamentation in gold and colours, and skilful design and layout on the page, could all combine to make a true work of art.

Manuscripts of Buddhist scriptures, ornamented with gold and silver, began to be produced in the Nara period, but the most sumptuous Buddhist manuscripts, written on coloured and patterned paper with lavish ornamentation, are those which date from the Heian and early Kamakura periods. To this age belong such masterpieces of book production as the *Heike nōkyō* and the *Kunōji-kyō*. At the same time, manuscripts of great beauty containing the earliest works of native Japanese literature were written and illuminated, including copies of the *Man'yōshū*,

* Kenneth B. Gardner 英国図書館東洋文献図書部副部長

Kokinshū, *Wakan rōei-shū* and, above all, the magnificent *Nishi Honganji-bon Sanjūrokunin-shū*. Decorated manuscripts written in fine calligraphy enjoyed a brilliant renaissance in the Momoyama and early Edo periods, with the achievements of master calligraphers such as Hon'ami Kōetsu and Shōkadō Shōjō.

But the production of books of high aesthetic quality was not confined to manuscripts. In the field of blockprinting, also, many fine editions of Buddhist scriptures were printed in the years before the Edo period. Then, in the Keichō and Genna periods, the design and production of printed books, both blockprints and movable type prints, reached a peak of perfection with the Imperial editions (勅版) commissioned by Emperor Go-Yōzei, and the products of the Saga Press under the direction of Hon'ami Kōetsu and Suminokura Soan.

Luxury books of fine quality continued to be printed throughout the Edo and Meiji periods, and are still being produced in limited editions in the 20th century. The art of book illustration from the Edo period onwards gave an added dimension to the Japanese book considered as a work of art.

世界の歴史を通じて、文明というものが本質的に必要としたものの一つが、書くことのシステムを発達させることでありました。これを考え出してはじめて、人類は、多少なりとも永久性のあるかたちで自分たちの思想を遺し、行為を記録しておく方法を見出したのであります。ひとたび適切な方法が考え出されると、書かれた記録は次第に長く、また詳しくなる方向へ向ってゆ

き、これらの記録を軽便な形で納める必要が生じてきました。その結果が、われわれが「書物」(book)ということばで理解しているものであります。

その本質として、書物というものは昔から簡素で実用的なものでありました。扱い、読み、理解することが簡単にできさえすればその目的を達したのであります。しかし、この世の中には実用一点張りで始まったものが、時が経つにつれて洗練され発達し、遂には美的なものになるということがしばしばあるものです。こうした過程が、世界中の図書や肉筆写本 (manuscript) におけると全く同様に、日本の書物の場合にも現実に見られます。

こうした傾向が美を先天的に愛する国、日本に、見いだされても驚くには当りません。この国では書物に高い価値が与えられ、早くから、読書の趣味が十分に発達した文字の読める人々が存在し、特に江戸時代初期以降はそうであったからです。この講演で、私は、奈良時代から始めて、現代に至るまで、日本の歴史の全体をたどって、書物の美術の最もすぐれたものの例をいくつか見てゆきたいと思います。

ただ、ここでは、純粹な墨跡、書道の方の書物について詳細を申し述べることは、私の目的とするところではありません。書道はそれ自身独特に高度に特殊化された芸術形式でありまして、墨跡の写本 (manuscript) については、それ自体について別に一つの講演に価するのであります。

装飾写本

紀元後4、5世紀に中国の書物が初めて大陸から朝鮮を経て日本に移入されたころから桃山時代の終りまでは、日本の「写本の時代」と呼んでも差支えないであります。この長い期間に亘って多くの本が木版印刷もされ、その中には美しい印刷の仏典があることも事実ですが、概して言えば、高度に発達して、美術品として評価されたのは写本でありました。奈良時代およびそれ以前には、中国大陸からもたらされた多数の仏典の写本が日本で盛んに筆写されました。すでに奈良時代に經典書写のために宮廷内に写経所が創設されました。この時代に書写された書物はすべて卷子本の形態で、通例一

紙24行、1行17字詰でありました。時には、卷子の上半分に絵を画いて、下半分に書かれた経文の内容を説明することもありました。この種の挿絵入り経典の最も有名な例は「絵因果経」すなわち「過去現在因果経」で、奈良時代以降の年記のある断簡が数多く遺っています。写本に絵を画くというこの新機軸は、日本における書物装飾の歴史において画期的な事からでありました。

仏典は、本来は仏陀の教えの単純な記録でありまして、無地の紙に墨で謹直に書かれるものでありました。しかしながら、次第にそのような書きものが、それ自体あたかも仏陀自身を表わすかのように崇拜されるようになり、そのため経典の写本を美の対象にしたいという願望が生じてきました。奈良時代以降、経典は紺や紫に染められた上質の紙に金銀泥で記されるようになりました。奈良時代の装飾写本のなかで最も名高いのは、西暦741年に聖武天皇の勅命により、紫紙に金泥で書写された「金光明最勝王経」であります。この時代にはまた、文書の写しでいろいろの染め紙や金銀の箔を散らした紙に書かれたものもあり、正倉院にはこの種の文書が多数保存されております。

やがて、見返しに金粉を散らして金銀で画いた仏画のみならず、平安時代には、大和絵様式で時には鮮やかな色彩を施した絵をも描くようになりました。写本の料紙とその表紙は、しばしば非常に技巧をこらしたすばらしい文様（デザイン）で装飾されることがありました。

平安時代は、少数の特権階級、特に宮廷と結びついた貴族と大寺院とにとっては、贅沢の時代でありました。平安時代後半を通じて権力を有した富貴な貴族層は、お互いに競って善美を尽した経典写本を作るように指示をしました。これらの写経を金や銀や各種の色で装飾して、それらを寺社に寄進することによって、これらの施主たちは彼等自身のご利益を得ようとしたのであります。彼等の望みは要するに仏の位を得て、臨終に阿弥陀仏の西方極楽に迎えられることであります。経典の書写は、平安中期以後、浄土教の信仰特に法華経信仰の普及の結果として、非常に促進されました。最も贅沢に装

飾された平安時代後期製作の経典はほとんど例外なく「法華経」の写本であります。

これらの中で最も初期のものに「竹生島経」として知られているものがあります。その名は、この経がもとあったといわれている琵琶湖の中の島の名をとったものです。この経典は和様（日本風）の優雅な「楷書」で書写されており、源俊房の筆と伝えられております。そうすると11世紀のものということになりますが、あるいは10世紀まで遡るかと思われまゝ。金銀の料紙に、草花、鳥、蝶、雲形の下絵を施してあります。

「法華経」の肉筆写本は、大そう美しく書写され装飾されたものが平安時代を通じて数多くあって、一々触れるわけにはゆきません。その中には扇形の紙に書かれ、二つに折って次の紙と糊ではり合わせて扇形の折本にしたもの（扇面経）や、彩色下絵を施した小冊子の形で、「大和絵」風に宮廷女性の風俗画を画いてあるものもあります。

また、「法華経」全28品^{ホン}に他の短い経典を添えて、各品^{ホン}を別々の筆者に書かせたものがあります。こうした「一品経」の中で最も有名なものの一つは、かつて久能寺に蔵せられていたために「久能寺経」と呼ばれている美しい装飾を施した卷子本一セットであります。この写本は、現在鉄舟寺に保管されておりますが、色変りの染紙に書かれていて、金銀箔と金粉、そして鳥や草木の絵で丹念に装飾され、全体が精巧かつ優雅に構成されております。この「久能寺経」は12世紀中ごろのものと思われられております。

しかし、今日まで伝存した装飾経の中で最も豪華なのは、何と言っても「平家納経」であります。この壮麗な卷子本一組は、全部で33巻あって、平清盛を主とする平家一族によって、1164年（長寛2年）に宮島の厳島神社に奉納されました。各巻の表紙と見返しには金銀その他の色をぜいたくに使って、その巻の経文の内容を表わした絵が描かれております。本文自体を記してある料紙も惜しみなく装飾が施してあり、平安時代後期に頂点に達した技術と技巧の最高水準を示しています。技術的な完成度において、「平家納経」

は、今日もなお中世日本における書籍芸術の最高の達成を示しており、また絵画や書道や、装飾図案の分野においても抜群のものであります。

平安時代後期はまた、紺紙に金文字で書かれた一切経が数多く書写されたことでも注目すべき時期であります。その一切経はしばしば見返しに金泥で絵が画かれています。それらのうちで現存する最も優秀なもの二つがともに岩手県の中尊寺に奉納されています。そのうちで、先に出来上った方は、その中の4296巻が高野山の金剛峯寺に保存されておりますが、西暦1117年(永久5年)から1119年(元永2年)にかけて藤原清衡の命によって作られたものであります。これは1行おきに金泥と銀泥で書かれて、見返しには金ですばらしい絵が描かれています。もう一つの「一切経」の写本は、これもまた国宝に指定されていますが、1176年(安元2年)に藤原秀衡によって中尊寺に奉納されております。これは紺紙に金字で書かれて、今残っている巻々は、現在岩手県の大長寿院の所蔵となっております。

この2つの写本はともに、各巻の冒頭に金泥の見返し絵があるために、仏教美術の歴史の上できわめて重要な価値を有しております。

今述べた装飾経のほかに、平安時代には、日本文学の最も初期の作品が、教養のある貴族の間で書き伝えられました。現存する最も美しいものに、「万葉集」・「古今集」・「和漢朗詠集」・「三十六人集」といった著名な歌集の写本などがあります。このどれを見ても平安後期の貴族達がいかに贅沢を好んだかがよく分ります。料紙は上等なもの、時には色とりどり(色変り)に染められ、金銀箔を施しあるいは金粉を散したものが用いられました。優雅な筆蹟(文字)で和歌を書いた料紙に、鳥、草木、幾何学模様などを風流に描いたり木版で刷ったりしたものもあります。特に、それらの下絵は、その上に書かれる和歌の文字と調和して、決してそれを読みにくくしたり、読者が文字よりもその下絵に気を取られたりすることのないよう配慮されています。

今回、これらの文学作品の写本の中から、その装飾と筆跡のみごときをお見せするために10例を選んでみました。最初は「桂本万葉集」で、金銀の下

絵を施した壮麗な写本でありまして、現存する「万葉集」の古筆で平安後期に遡る五つのうちの一つです。これは、美術品としても、最初期のそして最もすぐれたものとされています。「万葉集」の零本でもう一つ美しいのは「金沢本」で、色変りの「唐紙」に書かれ、雲母刷りで草木や花鳥を描いています。「万葉集」の和歌は優雅な草書体で書かれ、12世紀の藤原定信の筆かとも思われます。この時代の「万葉集」の重要な古筆としては、ほかに「藍紙本」・「天治本」・「元暦校本」があります。

今度は「古今集」に目を転じますと、この有名な勅撰集には多くの古筆切があります。中でも重要なのが「高野切」と「元永本」です。「古今集」のうち3巻が「高野切」として残っています。11世紀の美しい筆跡で書かれ、紀貫之の筆とされていますが、この伝承は現在では採用されていません。高野切は3人の手になることが確認されており、そのうち第二種は、「桂本万葉集」と同筆と思われます。「古今集」の完全な本文として最も古いものは、1120年に書写された「元永本」で、卷子でなく冊子2冊から成っています。この本は、色変りの料紙で、金箔や金砂子が施され、さらに各面（ページ）には、雲母刷りのさまざまな下絵が描かれています。ほかに「古今集」の平安時代の写本としては、「本阿弥切」・「曼殊院本」、それと大倉文化財団所蔵の卷子本で序文を書いたものがありますが、いずれも、優雅な行書で「仮名」を美しく書いたものです。

「源氏物語絵巻」は、平安絵画の最高の成果としてよく知られていますが、写本（筆蹟）としても注意すべきものです。詞書の部分がぜいたくに装飾されているからです。

平安時代の文学作品の写本で最もすばらしいのは、おそらく西本願寺所蔵の「三十六人歌集」かと思います。全39冊中32冊が原型のまま伝存しております。鎌倉時代と江戸時代の補写が5冊、残る2冊は、20世紀の初めに切つて他の所蔵者に分けられました。この本の表紙は金銀で美しく装飾され、一方、和歌を記した料紙は、各面とも実にさまざまな模様と彩色が施されてい

ます。筆跡も実に見事なものです。

「西本願寺本三十六人集」の書写年時は分りませんが、その書体や料紙は「元永本古今集」のそれと大変よく似ていますので、この二つの写本は、ほぼ同時期—12世紀初頭—のものだと断定してよいかと思われます。

この有名な写本と京都の西本願寺との結びつきは、後奈良天皇が本願寺の證如上人を寵愛してこれを賜わった1549年に始まり、それまでは皇室の所有であったと考えられています。

平安時代のすぐれた書家がしばしば書写した作品としては、ほかに「和漢朗詠集」という漢詩と和歌の集があります。この集の最も美しい書写本をあげれば、次の三つでありましょう。疑問ながら11世紀の有名な書家藤原行成の筆とされる「近衛本和漢朗詠集」、これまた行成筆とされていますが多分「近衛本」と同じ手になる「粘葉本和漢朗詠集」、そして藤原伊行が1160年に書写した、「葦手絵和漢朗詠集」の三つです。

「近衛本」は、その名が示すとおり、長く近衛家に伝えられたもので、今は陽明文庫に保管されています。卷子で、色変りに染めて模様を木版で刷った「唐紙」をついであります。「粘葉本和漢朗詠集」は、各面色変りの料紙の上に花の模様が刷られており、近衛本とちがって粘葉装で2冊です。1878年に近衛家の所蔵から御物（皇室所蔵）となりました。

「葦手絵本」は、池のほとりて風になびく葦を描いた下絵であるが故にこの名がありますが、和歌のいくつかの仮名文字が、風景の中に半分隠れて見えます。色変りの装飾料紙に書かれた「和漢朗詠集」の現存する古筆は、漢字と平仮名の優雅な配置が美しい調和をなしていて、その点で、特筆に値するものです。

さて次に、有名な写本が完成の極を見せた平安時代から、鎌倉・室町時代へと話を移さねばなりません。この混乱期には、書物芸術が、概して、平安時代ほど目ざましい発達をとげなかったことを認めなければなりません。仏典の書写は以前と同じように続き、禅の普及と中国からの禅の書籍の渡来と

に刺激されて、むしろ量的には鎌倉期以降増大しました。しかし写本の芸術性は衰退しました。それは、前代平安時代の「平家納経」のようなすぐれた写本を産み出すに至った貴族社会の富裕な援助を失ったからです。それに代って、立派な「絵巻物」の発達を見ますが、そこでは絵と字とが組み合わされて、巻物の形の中にみごとな芸術作品を作っています。しかしながら、「絵巻物」について詳しく述べることは、ここでは適当ではありません。これらの絵巻物は、確かに日本文学の流れの中では重要な物語を記していますが、普通の意味でまず書物と見なされていないからです。

美しい文字で書かれた装飾写本は、桃山時代から江戸初期にかけて輝かしい復活を見ました。これは主として、本阿弥光悦、近衛信尹、松花堂昭乗、烏丸光広といった才能ある書家の出現によるもので、中でも最も偉大な天才は、美術家、書家、そして多くの工芸の名手としても有名であった光悦でした。彼はまた意匠家としてもすぐれ、そのことは後に触れる「嵯峨本」なる版本の構成や模様にも見られ、また「千載和歌集」の和歌を書写した卷子のような名筆によってもうかがわれます。この写本において光悦は、四季の草木や花を雲母摺りにした下絵の上に、優雅な草書体で和歌を書写して美事な構成や余白の扱いを見せていますが、これは彼の他の作品にも共通することです。

江戸期には数多くの装飾写本が作られましたが、だからと言って、装飾仏典が17、8世紀まで作られ続けていたという事実を見落してはなりません。17世紀前半の書写で筆者不明の卷子本、「法華経」8巻がありますが、その見返しは金泥で美しく画かれております。本文は紺紙に金泥で、太い楷書で書かれています。界線には金箔を貼り、裏側は金のぼかしやそれを引き立てる襷文様（斜めの縞）にして、美しく仕立ててあります。奈良時代に始まった装飾仏典は、一千年後にもまだ十分生き続けていたことが明らかであります。

版本の美術

ここで美術品の形を持った肉筆写本から転じて、刊本（印刷された本）の

特に美しい本作りをいくつか見ることにします。あるいは、「三十六人歌集」ほど壮麗ではなく、名家の自筆本ほど個性的ではないかも知れませんが、それでも刊本は大変美しくすばらしいものと言えます。日本では印刷術が1200年以上の間に技術的に申し分ないレベルに達しております。日本はまた、世界に知られる最古の印刷物のふるさとです。764～770年に称徳天皇の命令で印刷された、有名な「百万塔陀羅尼」であります。日本における印刷術の発達について、8世紀から10世紀までのことは何も分っておりません。その時期の印刷物が遺っていないからです。その後、10世紀の終り近く、ようやく「摺り本」つまり印刷された本に関する公的な記録が出てきます。

何世紀もの間、印刷術は僧侶達の手握られておりました。当初は奈良及びその周辺の大寺院で行われていました。「法華経」卷子本の「春日版」の2種を申し上げますと、両方とも鎌倉初期あるいは中期のもので、巻軸(末尾)の料紙数枚に金銀箔が施されています。第一のは、天地に金銀の切箔をも施してありますが、文字が中国の写本や版本を思わせる四角く固いものであるのに対して、次のはもっと優雅で柔く丸みを帯びた字で、字面は細く、純日本的な感じを与えます。初期のすぐれた刊本としては、冊子体の旋風葉で、高野山の金剛峯寺で1279年に「金剛頂経」を刷ったものがあります。これは高野山における印刷物で最も美しいものの一つとされています。各冊の前後の表紙はぜいたくな紺紙で、外題は金泥で記されております。

木版印刷と寺院との密接な関係は鎌倉・室町時代を通じて継続・発展し、関西地方の寺院は一般の需要に応じて仏典の印刷に次第に意を用いるようになりました。木版による印刷は面倒な技術を要しますので、中世の日本で仏教寺院の保護に頼り続けていたことは何ら不思議ではありません。当時国内は何世紀にもわたって相次ぐ戦乱や社会不安にさらされており、信仰と学問との行われた寺院だけが比較的静けさを保持していたからです。印刷が商人の手に渡って利潤をあげるようになるのは、江戸時代に入ってからのことです。

活字印刷、つまり木版に彫ってではなく活字で印刷する技術が日本にもたらされたのは、16世紀の終り近くでありました。これは朝鮮で、そして中国では何世紀も前から行われていたもので、豊臣秀吉が1592—1597年の朝鮮出兵から引揚げた際に朝鮮で作られた漢字の活字を何組か持ち返りました。これが直ちに日本に取り入れられて、朝鮮の漢字をお手本にして新たに木や金属の活字が作られたのです。慶長初年には、天皇の命令や当時の幕府の指示あるいは西日本のいくつかの寺院によって、みごとな版本が何種類も作られています。古活字版という新しい技術が急速に広まったわけです。

天皇の命令で印刷されたものすなわち「勅版」で最も美しいのは、後陽成天皇の命によって、1599年に出た四書でありまして、その太く四角い、均斉のとれた漢字によって、本書は日本の印刷史上、そして書物の製作を芸術のいとなみと見た場合に、一期を画するものであります。また同じ年に出た美しい「勅版」としては、「日本書紀神代之巻」の最初の版があります。

日本における活版印刷の黄金時代は1590年ごろから1640年ごろまで50年位しか続きませんでした。経済的な困難から急激な衰退が起り、日本の印刷術は木版に戻って、以後200年余り、ほとんどそれで通してきたのです。明治時代になってようやく、活字印刷技術が再び輸入され、日本における印刷の標準的な方法となりました。

けれども慶長から寛永に至る短い期間に栄えた新しい技術は、日本の刊本の中で最もすばらしいいくつかのものを産みました。仏典や漢文の書物ばかりでなく、純粹日本文学のすぐれた古典が多数、漢字と優雅で流麗な線を持った仮名とで初めて印刷されたのです。中でも特に著名なのは、意匠と版の美しさを狙って刷られた日本で最初の私家版で、その印刷された京都の北西嵯峨、鷹ヶ峰の地名をとって「嵯峨本」と呼ばれています。その費用を出したのは富裕で教養のある町人、角倉素庵で、その援助の下にかの有名な工芸家本阿弥光悦が、意匠をこらしてぜいたくな本作りをしたのであります。嵯峨本の中には絵入り版本もあります。例えば「三十六歌仙」を版にしたものが

そうです。また、光悦自身の書いた文字から作った活字による印刷に、五色の上質な色変わりの染紙を用いて精巧な木版の挿絵を添えたものもあります。これは慶長13年及び15年に出た「伊勢物語」の版二種であります。恐らく嵯峨本の代表作は、厚い、胡粉の入った色変わりの紙を用いて、表紙や本文に雲母刷りで下絵を施した、「謡曲百番」でありましょう。印刷技術や紙の質、墨、絵具から見ても、文字や意匠の控え目な美しさから見ても、嵯峨本は日本の印刷本の歴史の中で特異な位置を占めるものであります。

江戸時代は日本に平和と繁栄をもたらしました。読み書きできるのは、もはや貴族や僧侶だけではなくっており、本作りは仏教の束縛を脱して、印刷や出版を商売とする人々の手に渡りました。都市の人口が増えるにつれて読書人口は増大の一途をたどり、書物の需要はますます多くなったのです。出版社は思い切って部数を多く出すこともできるようになりました。全部売れると確信できたからです。最も多く出版されたのは小説や短篇とか軽妙な詩歌といった娯楽的な文学ですが、しかしながら量は質と相応していたわけではありません。一般大衆向けに作られる本のレベルは、僅かの例外を除いて、18世紀から19世紀を通じて下り続けたのですが、例外というのは、主として和歌、俳句、狂歌といった詩歌の本や少数数刊行されて私的に配られる「配り本」で、それらには意匠やレイアウト、印刷技術において鑑賞に耐えるものがあります。それらにはしばしば挿絵もありますが、江戸時代の印刷術で長足の進歩を示したのは、本の挿絵でありました。

江戸初期以降、日本の文学作品が印刷されるようになると、本の挿絵が息を吹き返しました。創作にはほとんど常に木版の挿絵を入れることが通例となったのです。これらの木版は初めは素朴なスタイルでしたが、次第に質的に向上しまして、西鶴やその同時代人達の小説「浮世草子」が刊行された17世紀末には、刷りや彫りの技術は大変高い水準に達しました。

けれども、本の挿絵が最高のレベルに達したのは18世紀から19世紀初めにかけてであります。そのことは「絵本」と呼ばれる木版本から言えるのです

が、それには、彩色や白黒で、南画や文人画、丸山一四条派、浮世絵派などの様式に属していた画家達の絵が刷られております。こうした「絵本」は、一般に美術品としては重要なものとされておりませんが、技巧や機智、ユーモア、優雅さ、美しさなどの点で、それなりにちょっとした傑作であります。

配分が悪くて、残念ながら、最近100年、殊に大正・昭和期に限定版として刊行された多くの美しい本については、公平を期することができません。しかしながら終りに、近代の本二つについて申し上げます。確かに芸術の営みと考えてよい、本作りの伝統が続いていることを示す好い例だと私には思われるものです。初めのは「絵本ドン・キホーテ」と題する本で、芹沢銈介装幀のカップ刷りや手描きの挿絵が31図入っております。1936年（昭和11年）に京都で刊行されたもので、100部限定版です。日本の書物の挿絵を伝統的な様式で製作した芹沢の画家・意匠家としての腕を示す好い例であります。

もう一つのは、近代的な様式の木版で富士山の景です。恩地孝四郎の作で、「新頌富士」と題する詩集から採ったものでして、1946（昭和21）年に出版されました。

20世紀の日本の書物は、平安時代の本とほとんど共通点がないように思われるかもしれませんが、書物を美術品とする考え方は、今日の日本にもかなり強く生きています。